

## 4.4 パラグラフ・ライティングで書く

いくつかの文の集まりを段落といい、いくつかの段落の集まりで文章が構成される。こと、そして段落の最初に一字分空けること(インデント=字下げ)は作文教育で教えらる。ところが段落が全体としてひとつの意味をもつ文の集まりであることを強く意識するようには教えられていないので、適当な長さになれば段落を区切る人も多い。アカデミック・ライティングでは「意味内容のまとまり=段落(パラグラフ)」という概念が重要で、以下の基本構造に注意して書く必要がある(このことをパラグラフ・ライティングとよんでいる)。

### 4.4.1 パラグラフとトピック・センテンス

ひとつのパラグラフでは限定されたひとつのトピック(主題あるいは論点)だけを論じ、いくつかのパラグラフを積み上げてひとつの文章(この場合はレポート)を構成する。即ちパラグラフは文章の基本ブロックといえる。単なる文の集まりとは次のような違いがある。

◎パラグラフにはトピック・センテンスが含まれている。トピック・センテンスとはパラグラフの内容の核心部分を一文で表した文のことである。英文のアカデミック・ライティングでは、トピック・センテンスはパラグラフの先頭に置くべしとされている。日本語では不自然になることもあるので、必ずしも先頭に置く必要はないが、どの文がそれであるかを意識して書くとパラグラフの意味内容を自分でも捕らえやすい。

◎パラグラフは「見出し」がつけられるような文の集まりである。できあがった文章の各パラグラフには「見出し」を付けないのが普通だが、パラグラフのもつ意味を強く意識するためにはトピック・センテンスをさらに凝縮した「見出し」を考えながら書くとよい。

◎トピック・センテンスと無関係な文はそのパラグラフに含めてはいけない。パラグラフに含まれるトピック・センテンス以外の文をサポート・センテンスといい、それらはトピック・センテンスを詳しく解説・補強したり、他のパラグラフとの関連を説明したりする。各サポート・センテンスはそれぞれトピック・センテンスとの関係を説明できるものでなければならない。これにより1パラグラフ・1トピックとなる。

ここではゴシック体で書かれた最初の文がそれぞれのトピック・センテンスとなっている。もっと大きなパラグラフの場合は、トピック・センテンスから始め、いくつかのサポート・センテンスを続け、最後にコンクルーディング・センテンスで締めくくることが推奨されている。

#### 4.4.2 箇条書きの薦め

パラグラフの中に多くのことを羅列する場合や、複数の各パラグラフが並列の要素である場合は(例えば前節)、箇条書きにすると視覚的にもわかりやすい。箇条書きの各要素が順序列的な意味がある場合には番号付の箇条書きにするとよい(4.3.1節を参照)。また、箇条書きする項目が多い場合や、各項目を相互に比較する場合には表にして本文に添えることもある。表にすることでわかりやすさが格段に増す。

箇条書きでは4.3.1 や4.4.1節のように、ぶら下げインデントとするのが普通である。
--

#### 4.4.3 パラグラフの見直し

序論→本論→結論のアウトラインに沿って各パラグラフの文章を練っていくが、そうは段取りよくいかず、書いているうちに思い浮かんでどんどん内容を付け加えることもよくある。こうなると文章がこんがらがってしまうので、パラグラフの区切りを変えたり新しいパラグラフにしたりして、パラグラフを見直す必要がある。各パラグラフに見出しを付けて、その見出しをマップ化してアウトラインを再構築すると論理構成の欠陥が見つかることもある。